

『サントスのご作業』における「天狗」

筒 井 早 苗

1. はじめに

『サントスのご作業のうち抜書』の冒頭部分は、次のような書き出しで始まっている。

今日サンタエケレジヤよりサンペドロ、サンパウロ一切人間の三つの敵に対せられて御運を開き給ふところを悦び申さるるものなり。三つの敵とはわが身、この世界、天狗これなり。¹

キリシタンは、すべての人間の敵である自己と現世、そして「天狗」（悪魔）に打ち勝ち、この世の命を超えた、キリストにある永遠の命を得ることが求められた。永遠の命を得るために、時にはペドロやパウロのようにこの世の命を捨て、キリストの受難にならってマルチル（殉教者）にならなければならなかった。

実際に天正十五年（1587）、バテレン追放令が出され、慶長元年（1596）

1 福島邦道『サントスの御作業 翻字研究篇』、勉誠社、1979。以下、『サントスのご作業』の本文は基本的にこれによる。福島氏は句点にピリオド(.)を用いているが、通常の句点(.)に改めた。パレット写本については、尾原悟『〈キリシタン文学双書〉サントスのご作業』（キリシタン研究第33輯）、教文館、1996を使用。パレット写本を引用するときのみ、その旨を引用文の後に示す。

に日本で最初のキリスト教徒の殉教者である二十六人が長崎で処刑される。その後も徳川政権のもとでキリスト教に対する禁制は強化され、多くのキリシタンが迫害を受け、殉教の死を遂げた。『サントスのご作業』に収められた聖人伝の多くは殉教録であり、キリシタンたちはこの書物によって、現実にせまりくる迫害の中で殉教の意味を深く問われたことであろう。

ところで、先ほどの冒頭部分をもう一度見てみると、人間の敵として「天狗」が挙げられているのが興味をひく。『サントスのご作業』をはじめとして、キリシタンの文学においては悪魔 (diabo) のことを「天狗」と翻訳した。そのことにより、様々な誤解や混乱があったことも指摘されている²。

天文十八年 (1549) 八月に日本へ渡り伝道を始めたザビエルは、マラッカで出会った日本人アンジロウ (ヤジロウ) の情報にもとづいて、「大日を拝みあれ (Dainichi vo uogamiare)」というように、神を仏教語である「大

2 米井力也「天狗と仏神—キリシタンと仏教—」(説話と説話文学の会編『説話論集』第五集, 清文堂, 1996。同著『キリシタンの文学 殉教をうながす声』, 平凡社, 1998にも所収。)米井氏は、仏僧はキリスト教の神を「天狗」「天魔」と呼び、キリスト教宣教師もまたキリスト教の悪魔を「天狗」「天魔」、仏教の仏を「天狗」にあやつられた存在と規定することで、「信仰の対象をどこにもとめるのか」という議論の成立しえないすれちがいが、翻訳を媒介として増幅された(『キリシタンの文学』99ページ)とする。

紙谷威広『キリシタンの神話的世界』, 東京堂出版, 1986。紙谷氏は、「「天狗」は、キリシタンの生きる意義を明らかにしてくれるものであって、「神話」を構成する重要な要素となっている。しかしながら、日本人の多神教的な民間信仰の基盤を考慮しないまま、「天狗」という両義的な概念を悪魔にあてはめたことによって、旧約聖書とは異質な雰囲気をもたらす「神話」となってしまったことは明らかである。」(65ページ)という。

日」と呼んだ³。しかし誤解が生じたため、ザビエルはその後「デウス (Deus)」という原語をそのまま用いるように方針を転換した⁴。イエズス会宣教師のガゴも、仏教用語でキリスト教を説くことによって生じる誤解を指摘し、五十語以上の仏教語の使用をやめ、原語主義をとるようにしたという⁵。

しかし、悪魔はその後も「天狗」「天魔」などと訳されつづけた。この理由について米井力也氏は、以下のように述べる。

もちろん、神を「デウス」と呼んだように、たとえば悪魔をポルトガル語 Diabo (悪魔) に基づいて「デアボ」と呼ぶこともできたはずである。しかし、そうすれば、天竺からきたあの宗派は「デウス」と「デアボ」の対立を説いているらしい、というようにたんなる外来の宗教の内部における争闘としか受容されなかったかもしれない。〈中略〉日本の仏教という異文化を断罪するためには、仏教をキリスト教文化の範疇に組み込むだけでは不十分だったからこそ、キリシタンはあえて「天狗」という異文化のこぼれを用いなければならなかったのである。⁶

悪魔を「天狗」と表現することによって初めて、仏教の「仏」もキリスト教の神の前では悪魔に支配された偶像でしかないことを糾弾することが可能になったという、大変興味深い指摘がなされている。

本稿ではこうした指摘もふまえて、さらに『サントスのご作業』に描かれた「天狗」がどのように表現されているのか、なぜ悪魔のことを「天狗」と表現したのか作品世界の内実から考察したい。

3 鈴木範久『聖書の日本語』、岩波書店、2006。3～6ページ。

4 井手勝美「25「大日」「天道」「天主」「提字子」」、H. チースリク他監修『日本史小百科〈キリシタン〉』、東京堂出版、1999所収。114～115ページ。

5 土井忠生「十六・七世紀における日本イエズス会布教上の教会用語の問題」、『キリシタン研究』第十五輯、吉川弘文館、1974。51～52ページ。

6 注2『キリシタンの文学』101～102ページ。

『サントスのご作業』は、天正十九年（1591）に二種編纂された。一つは長崎の加津佐刊『サントスのご作業のうち抜書』であり、もう一つはイエズス会の宣教師マノエル・バレットによって書かれたバレット写本である。活字本と写本には共通する話が十七篇あるが、同じ話でも異同が多い。また活字本だけに収められた話が十四篇、写本だけに収められた話が十五篇ある⁷。活字本は主に養方パウロ、洞院ヴィセンテ父子が翻訳、編纂に関わっているのに対し、写本はバレットによって書き写されたと言われており⁸、こうした背景も両者の違いに関係していると思われる。

さらに、『サントスのご作業』は原典を翻訳している翻訳文学である。その原典も一つの聖人伝を取り上げているわけではなく、いくつかの異なる聖人伝から選んで翻訳しているため、原作者における編纂や叙述の方法にも注目しなければならないが、『サントスのご作業』という作品全体をとおして目指しているテーマは活字本、写本ともに、キリストへの信仰を貫きとおすことの重要性和、そのためには殉教の死をも厭うどころか、かえってそれを喜び賛美するという一つの方向性が明らかであることから、本稿ではそれらの問題には触れなかった。

また『サントスのご作業』の原典が作られた時代とそれを享受した十六世紀の宣教師たちの悪魔像にはおそらくなんらかのずれがあり、日本において抱かれた天狗のイメージも中世的なものから近世的なものへ移り変わ

7 注1尾原悟氏による解説・解題『『サントスのご作業』について』391ページ。同解説・解題に、「バレットが一五九一年に書き写した写本には三二篇、活字本には三一篇の聖人伝が収められている」とある。

8 注1『サントスの御作業 翻字研究篇』参照。365～366ページ。バレット写本はバレットが翻訳したというわけではなく、すでにパウロやヴィセンテ、他の宣教師たちなどによって翻訳されていた聖人伝から、いくつかを選んでバレットが書き写したといわれている。（H・チースリク「サントスの御作業—神学的・歴史的考察—」、『サントスの御作業』、勉誠社、1976所収。16ページ）

ろうとしている過渡期であるだけでなく、異文化の悪魔を「天狗」と翻訳する作業が加わって錯綜しているが、作品そのものに描かれている「天狗」を中心に論述した。本文は基本的には活字本を用い、活字本にない聖人伝はバレット写本を用いることとする。

2. 「仏」にとりつく「天狗」と魔来迎説話

『サントスのご作業』全体をとおして見た時、そこに描かれた「天狗」にはいくつかのパターンが見出せるが、主な性質のうち、本稿においては偶像にとりつく「天狗」、執心する「天狗」、怒る「天狗」、デウスに従う「天狗」の四つに分けて、考察したい。

まず、偶像にとりついた「天狗」について見ていく。「サントウメ」伝では、トウメがある国の主人の妻をキリシタンになし、その夫人が夫婦の交わりを拒絶したために主人が怒る。主人はトウメに熱した鉄板の上を歩かせたり、塚穴に火を焚いてその中に閉じ込めたりしたが、デウスの守りがあるために何の害も受けなかった。

その後又日輪の形を拝ませ奉らんとしければ、デウスの御力をもつてかの形の内にこもり居ける天狗出でて、蠟の火に消ゆるごとくになれと宣ふとともに、本尊たちまちくだけければ、もろもろの出家等声をあげて、我等が仏の恥をすすがんとて槍にて突き殺し、マルチルになし奉れば、御アニマは天に至り給ひ、御死骸をばキリシタン納め奉りぬ。

トウメがデウスの御力で本尊から「天狗」を追い出すと、本尊は砕けてしまう。本尊は「天狗」に支配された、ただの偶像であったことが示される。トウメは「天狗」を追い出したことが原因で、異教の聖職者たちの反感を買い、殉教する。さらに、この本尊のことを「仏」と呼ぶことで、異国の偶像崇拜を非難する話が、日本の仏像を批判する話として読み替える

ことも可能になる。

「サンバルトロメウ」伝にも、「仏像」にとりついた「天狗」が出てくる。バルトロメウがある国でアスタロトという「仏像」が安置された天堂の中へ入ったために、その「仏像」にとりついていて「天狗」は火の鎖でからめられ、口が利けなくなった。他の「仏」たちもバルトロメウのアンジヨ（天使）に捕らえられていることが、まだ縛られていない「天狗」の口をとおして明らかにされる。そして、「或る人天狗につかれ、声をあげて、このアポストロに、デウスの御仕へ人御身のオラシヨは我等を焼き給ふと、言ひければ、アポストロ、いかに賤しき天狗、急ぎてそれを去れと宣ふとともに、たちまち天狗退きぬ。」というように、「天狗」が自ら使徒のオラシヨ（祈り）に触れたことで生じた苦しみを告白する様子が描かれる。

他の場面でも、バルトロメウが「仏のうちにこもりたる天狗に対せられて、疾く出でて、その仏を打ちくだけと、宣へば、天狗外にあらはれ出でて、仏をば微塵にくだきぬ。」ということが起こる。ここでも「天狗」が「仏」の外にひき出されると、「仏」は微塵に砕けてしまう。バルトロメウがこの「天狗」に、だれも人が通らない所へ行つて世の終わりまでいるようにと命じると、「天狗」は退いて消えた。使徒はデウスを信じるが故に、「天狗」をはるかに凌ぐ強い力を持っている。

これを見た国司が自らをはじめとして万民をキリシタンにしたので、異教の出家者たちは国司の弟へ訴え出る。「かの舎弟も同じ天狗の奴なれば口惜しく思ひ」と、出家者たちはもちろんのこと、国司の弟も「天狗」にとりつかれた者として描かれている。バルトロメウはこの舎弟が信じている本尊にとりついていて「天狗」をも追い払い、本尊を微塵に砕いたので、舎弟は「怒りをなして」、バルトロメウを打擲し、五体の皮をはいで苦しめる。

「天狗」を追い払い、「仏像」を打ち砕くという同じ奇跡を目の前にして、悔い改めてデウスを信じる者と、怒りをなして使徒を苦しめる者へと別れ

ることが示されている。舎弟はこの後眷属とともに「天狗」につかれて大きな苦しみを受け、死んでしまう。キリストを信じた舎兄のほうは、ビスポになって遂には上天の快樂を得たことが記される。この話を讀んだり聞いたりした日本人たちは、「仏」「天狗」という言葉を媒介に、遠い外国の話としてではなく、自分たちの身にも起こりうる話として享受することができたであろう。

「サンシモン サンジュダス」伝では、シモンとジュダスがある寺で日輪の「仏像」に捧げものをするように命じられた時、人に憑いていた「天狗」が大声を上げ、「いかにデウスのアポストロス御身は何とて我等を責め給ふぞ？ その故はこの所へ入り給ひてより我が身を焼かるものなり」と叫んだ。「天狗」は完全に神の支配下にあつて、使徒のために苦しめられている。これはマタイによる福音書8章28～34節にある、イエスが悪霊に憑かれたガダラの人を癒す話に出てくる悪霊の叫びに通じるものがある⁹。

そこへデウスのアンジヨが一体現れて、以下のように述べる。

二つの中いづれをか取らるべきぞ？ あるいは恐ろしき責めをもつて御身の敵を殺さんか？ あるいは彼等を生けおくをもつて御身殺され給ひてマルチリヨを受け給はんかとなり。

アンジヨは敵を殺すか、あるいはシモンたち自身が殺されてマルチリヨを受けるかどちらがいいか、彼らに尋ねる。神は全能であつて、悪を滅ぼす力もちろん持っているが、あえてそれをしないで、聖人のマルチリヨによって神の栄光をあらわす道もあることを示しており、なぜ神は全能であるのにご自分の聖徒を救い給わぬのかという疑問への一つの答えとなつ

9 マタイによる福音書8章29節に、「突然、彼らは叫んだ。『神の子、かまわな
いであれ。まだ、その時ではないのにここに来て、我々を苦しめるのか。』」（新
共同訳）という悪霊の叫びが記されている。

ている。

このアンジヨの問いに対して、「アポストロス汝達かの仏体には天狗満ち満ちたりと知るべきために、我が下知すべきことを見よとて、天狗出でて、その仏体を破却せしなり。」と、シモンたちは「仏像」にとりついた「天狗」を追い出して、「仏像」を破却する。それを見た僧たちは彼らを殺した。この話でも「サントウメ」伝、「サンバルトロメウ」伝の場合と同じく、使徒たちが「仏像」に取りついている「天狗」を追い出して「仏像」を破壊したために、異教の聖職者たちの怒りを買って害されている。「天狗」を偶像から追い払ってそれを破壊すると、異教徒は怒り、聖人を苦しめて殉教させるという一つの型を見出せる。

こうした「仏」の姿を取って現れる「天狗」について、日本における天狗説話を見てみると、魔来迎説話と呼ばれる型がある。『今昔物語集』巻第二十の第十二「伊吹山三修禪師、得天宮迎語」では、「心ニ智リ無シテ、法文ヲ不学ズ、只弥陀ノ念仏ヲ唱ヨリ外ノ事不知。」¹⁰という三修禪師のもとへ阿弥陀仏に化けた天狗が来迎し、禪師は簡単に騙されてしまう。この話は『宇治拾遺物語』や十三世紀末に作られた『天狗草紙』などにも取り上げられており、広く知られた説話であった。同じく『今昔物語集』巻第二十の第三「天狗、現仏坐木末語」では、実のならない大きな柿の木の上に仏が現れたが、それは天狗が化けた仏であった。この天狗は源光によって偽の仏であることが明らかにされる¹¹。

『サントスのご作業』では、すべての偶像が「天狗」のついた悪しき存

10 新日本古典文学大系36, 小峯和明校注『今昔物語集』四, 岩波書店, 1994. 251ページ。

11 この説話も『宇治拾遺物語』に収められている。『宇治拾遺物語』は中世から近世にかけて読みつがれ、近世初期に出版されてからは人々に多大な影響を与えるようになった。(小峯和明『宇治拾遺物語の表現時空』, 若草書房, 1999. 262~267ページ) こうした天狗説話も近世に読まれ、享受されていた。

在として非難されるのに対し、『今昔物語集』では、真の仏と天狗の化けた偽りの仏という対比があり、後者が仏法に敵対するものとして位置づけられている。キリスト教における偶像と仏教におけるそれとでは、意味合いが大きく異なるが、どちらも「天狗」が「仏」の姿をとって人々を惑わし、デウスや仏法から引き離そうとしている点では同じであって、『サントスのご作業』における「仏」にとりつく「天狗」は、その魔性を仏に化けて人をたぶらかす仏教的な天狗の観点から理解できたのではないか。

3. 「天狗」と執心

「サンバルラン サンジョサハツ」伝は、釈迦伝に酷似することでよく知られている聖人伝であり、釈迦伝がキリスト教化して伝えられたものであると言われている¹²。王子ジョサハツに修行者バルランがキリスト教の奥義を教え示す話の中で、バルランは「人作の法を用ひ、よこしまの本尊を尊む迷のこともを懇ろにあらはし給ひ、これらの本尊は皆天狗なりと語り給ふなり。その上現世の栄華は皆偽りなることを語り給ひ、これに執心深き者の上をたとへをもつてあらはし給ふ。」と、本尊は皆「天狗」であることが述べられ、さらに現世の栄華に執心深き者について、二つのたとえ話を始める。

一つは、極めて仏教的な内容を持つたとえ話である¹³。ある人がウニコ

12 「ここにいふ聖ジョザハツの伝記は、〈中略〉釈迦の伝説がヨーロッパに入り、それがキリスト教の聖者伝と化して中世において尊重せられ、黄金伝説にも取められたものとされてゐる。」(柘源一「説話の流転と吉利支丹文学」、『国語・国文』第30巻第7号、1961・7。36ページ。)

13 『『バルラアムとヨアサフの物語』(筆者注：「サンバルランとジョサハツ」伝のギリシア語原典)中のアポローグは、マックスミュラーによれば、その主要な筋が東洋起原のものであることは、ほぼ推定できるといふ。」(注12の柘氏論文

ルニヨ（一角獣）に追いかけられ穴に落ち、かろうじて立ち木の枝に掴まって助かったが、その木の根元をかじっている鼠や穴の底にいる大蛇と悪竜のこともうち忘れて、そばにあった蜂蜜を舐めてうまいと思う。これをバルランは「終りなき一命のよろこびにいたらんことを歎かずして、長き苦患を受くべきことを忘れ、はかなきことに執心する」こととして非難する。特に、譬えの意味を説き明かす中で、「深き穴の底にある大蛇とは、世界に執着するものどもを待ちかくる火焰の淵なるインヘルノのことなり。」と、現世に執着する者はインヘルノ（地獄）に墮ちることが示されておられ、これは仏教において執心が天狗道に赴く契機となっていることと重なってくる。

もう一つは、ある人に三人の知音がいて、そのうちの一人を我が身より大切に思い、もう一人を我が身ほどに思い、最後の一人を我が身より下手に思っていたが、自分が危機に陥った時に助けてくれたのは、自分が一番軽んじていた知音であった。この第一の知音は財宝、第二の知音は妻子眷属、第三の知音はヒィデス（信仰）、エスペランサ（希望）、カリダアデ（愛）などの善事善行を譬えている¹⁴。この第三の知音は、「これすなはち死する時先に立ち、デウスの御前を申しととのへ、敵となる天狗の手をのがす」という。この二つ目の譬えも執心深き者のたとえ話として語られていることから、財宝や妻子眷属への執着を断ち切り、ヒィデス、エスペランサ、カリダアデを重んじる者は「天狗の手」から逃れることができるが、現世への執着を断ち切れない者は「天狗」にとりつかれ、やがてはインヘルノ

39ページ参照)

14 コリントの信徒への手紙一13章13節に、「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」（新共同訳）とある。ちなみに、この教訓話と同話を持つ『伊曾保物語』のそれにおいては、第三の知音は「いささかのよきやう」とあり、もともと『伊曾保物語』にはキリスト教的な色彩はなかったという。（注12の柗氏論文43ページ参照）

(地獄)へ墮ちることが暗示されている。

執心については、同じく「サンバルラン サンジョサハツ」伝の冒頭に、ジョサハツの父である帝がキリシタンを弾圧する中、帝が重んじていた臣下がキリシタンとなって出奔する話がある。この臣下を探し出して、帝がなぜすべてを捨ててそのような身になったのかと問い詰めると、臣下は「そのいはれを聞きし召さんと思し召されば、敵をしりぞけ給へ」と答える。「その敵とは何者ぞ」と帝が問うと、臣下は以下のように答える。

怒りと、骨肉の望みなり。この二つは世の始まりより、人間の身を育つために与へられしものなれども、スピリツのことを知らず、肉身の事のみ執心をとどめ給ふ人のために、右の二つは敵となる。故をいかにと申すに、骨肉の望みは妄想の逆心故に、遂には怒りを発して我と身をくづすこと歴然たり。

肉身にのみ執心をとどめる者にとって、怒りと骨肉の望みは人生の敵となる。そして、骨肉の望みは妄想の逆心である故に怒りとなるという。怒りも執心の一側面として見ることができる。

さらに、「サンタヘプロニヤ」伝では、権門のセレノに捕まったヘプロニヤは、美人であったために「重任大器」であるリシマコとの結婚を勧められ、イドロス（偶像）を拝みさえすれば自分の財宝もすべて与えようとセレノに誘われる。しかしヘプロニヤは、「御身の約束し給ふことは皆実もなきことなり。いかに権門なるセレノ、無益の苦勞をなすことなかれ。おどさるるとも、恐るべからず、財宝にも執着せず」と言って、毅然と誘いを断る。ここでは、現世への執着を断ち切ることが救いへの第一歩として描かれている。

このように、現世へ執心する者は怒りと欲望によってデウスから遠く隔たっていることが分かるが、特に「サンバルラン サンジョサハツ」伝において繰り返しのことが説かれているのは、釈迦伝の変化した仏教的な説話であるために、仏教の嫌う執心が強く戒められているのであろうと思

われる。

特に日本の天狗を考える場合に、執心は天狗と関係の深いキーワードである。天狗は現世への執着を断ち切れない者にとりつく。天狗道(魔道)は、驕慢や執着のために仏僧が堕ちるところであった。貞慶の『魔界回向法語』には、「日夜ノ所作恐ハ皆魔業也顛倒墜墮シテ難シ期ニ解脱ヲ〈中略〉就レ中ニ命終之時苦重ク心迷ヘ魔界得レカヲ行業徳至リ運心年久キ人猶ヲ多ク不レ遁ト其ノ難ニ況ヤ於テ我々我等^ヤ耶」¹⁵とあって、命が終わる時に魔界が力を得て、長年仏道修行に励んできた僧であっても、それから逃れたいことが示されている。

『比良山古人霊託』は、延応元年(1239)五月に比良山の大神が二十一歳の女房にとりつき、法性寺において慶政がその天狗と交わした問答の記録であるが、この大神は「法性寺の辺の惣領主」、「根本惣領主」¹⁶であるといい、法性寺周辺の土地に強く執心している。また、慶政の「いかなる意の人の、天狗道には来るや。」という問いに、大神は「驕慢心、執着心の深き者、この道に来るなり。」¹⁷と答える。

驕慢については、『サントスのご作業』でも「サンマチヤス」伝に記されている。

そのまことの極めは、ガラサを受け奉るために、妨げを退きて身を調ゆるものにガラサを与え給ふこと少しも疑ひなきことなり。この調へといふは、へりくだりなり。〈中略〉それにかはつて妨げとなることは、慢気なり。その故は、〈中略〉デウス高慢なるものを捨て給ひ、へりくだりたる者にガラサを与へ給ふといふ語なり。

15 関口静雄「〔資料紹介〕解脱房貞慶作『発菩提心講式』および『魔界回向式』について」、『梁塵 研究と資料』12, 1994・12。74ページ。

16 新日本古典文学大系40, 木下資一他校注『宝物集 閑居友 比良山古人霊託』, 岩波書店, 1993。457～458ページ。

17 注16の472ページ。

『妙貞問答』下にも、「彼安如ノ内ニルシヘルト云イシ者、己レガ靈徳ノ勝レタルニ奢テ天恩ヲ忘レ、デウスノ御位ニモ成ナント云高慢ヲ発シ、」¹⁸とあって、ルシヘルは自ら神になろうという高慢を起こしたために、「天狗」になって苦しみ続けることになった。仏教と同じく、キリスト教においても驕慢は執心と同様に神から遠く離れ、「天狗」になる原因であった。

他にも日本における執心の例を見ると、『沙石集』巻第四ノ五「臨終に執心を畏るべき事」に、小原の上人が現世への妄念・執心があるまま、首を吊って臨終を遂げたために、魔道に堕ちてしまったという話がある¹⁹。

このように、執心する者、高慢な者が「天狗」になるという思想は、日本の仏教だけでなく『サントスのご作業』における「天狗」にも見られる性質であるといえる。

仏教的な伝記が一旦キリスト教化されて、さらに日本へこの話が入ってきた時に、悪魔は「天狗」と翻訳された。そのことが、執着する者は天狗に捕らえられるという、日本的な文脈で悪魔を受け入れることができる読みを可能にしたのではないだろうか。

4. 怒る「天狗」と怨霊

現世へ執心する者は怒りと欲望に支配されていることを先に確認したが、『サントスのご作業』では、怒る権力者を繰り返し描いている。

「サンラウレンショ（ロウレンソ）」伝では、キリストを信じるフィリップ帝王と太子を殺して天下を奪ったデシオが、帝王たちの宝のありかを探

18 日本思想大系25、海老沢有道他校注『キリシタン 排耶書』、岩波書店、1970。166～167ページ。

19 この話は『拾遺往生伝』下と同話であり、類話が『発心集』『私聚百因縁集』などにも見える。

ウレンソに尋ねるが、何も答えない。そして、ロウレンソが「汝は天狗とともに責めらるべければ、果報つたなし」とデシオに向かって言う。デシオには「天狗」がとりついているため、悪事をなすのだと考えられている。この言葉を聞いて、デシオは「いよいよ怒りをなし」とあるように、怒りは「天狗」の仕業であったと思われる。デシオはロウレンソと言葉を交わすごとに怒りの度合いが増していき、その度にロウレンソに拷問を加える。デシオが鉄の熊手でロウレンソの皮肉を搔かせると、彼は「笑み顔を以てデウスを深く尊み給ふ」とあり、デシオの怒りとロウレンソの笑顔が対照的に捉えられている。

「サンタオラリヤ」伝では、十三歳という幼いオラリヤがキリシタンを捕らえて苦しめる守護に向かって、以下のように述べる。

たとひ天魔破句は新たに現前して、障りをなすとも、甘露のゼズとわが中をばさけ奉ることかなふべからず。色身をば汝の手に渡し、アニマのオンタアデはゼズスの御手に捧げ奉れば、再び改易すべからず。それによつて仏神に悪口することも止むべからず、又悪王も汝も皆果報つたなき者と我あはれむなり〈下略〉

最初は若いオラリヤに対し、命を大切にすると親切な言葉をかけていた守護も、このオラリヤの言葉を聞いて、「いよいよ怒りをなし」と完全に怒ってしまう。オラリヤはわざと守護を挑発して怒らせているようにも見える。それは、守護に会う前に「さても喜ばしきことかな！いかにジュリヤとにかくに我はマルチルになるべきぞ、よく心得給へ」とオラリヤが語った言葉に対応しており、彼女は初めから、守護を怒らせてマルチルになることを目指しているのである。

これは、「サンタアナスタジヤ」伝でも同様である。アナスタジヤは「天狗の奴」となった親類一族に告発され、守護の前に引き出される。イドロスを拝むよう「やはらかなる言葉」をかける守護に対して、アナスタジヤはきっぱりとそれを拒絶し、「マルチリヨを待ちかね給ふ心にて、権門の

心に怒りを起させんために」、「慳貪放逸なる守護」と呼びかけ、早く呵責を加えるようにと願う。そして、怒ってアナスタジヤに拷問を加える守護は、「強く天魔に犯されたるによつて、慳貪なる心をやはらげず」にいる。怒る守護に対し、アナスタジヤは目を天に向けて「笑み顔をあらはし」ている。

「サンヴィセンテ」伝でも、「サンヴァレリオとサンヴィセンテは深き喜びを以て、デウスの御事をあらはし給ひ、マルチリヨに馳せ向かせ給ふなり。」と、自ら教会の諸出家を召し取るダシヤノのところへ出かけて行って捕らえさせている。サンヴィセンテは拷問を受けながらも、ダシヤノに「笑み顔を以て〈中略〉汝わが喜びを制禁せず、汝は本望を遂げさする人なり。」と、マルチリヨが与えられることを心から喜び、「却て汝我に対して、瞋恚を起こすほど喜ぶなり。」と、ダシヤノが悪をもってビセンテを苦しめ、瞋恚の炎を燃やすほど、ヴィセンテはデウスから大きな力を受けて喜びに満たされる。

このように、「天狗」は悪しき存在であつて、怒りによって人を神から引き離すものであるが、その性質がマルチリヨのために積極的に用いられているような描かれ方がされているのである。これは次の章で考える、デウスに従う「天狗」の性質にも通じるものがある。

「サンクレメンテ」伝において、クレメンテは喜び、悪王は怒りを見せる。クレメンテは二十八年という長きに渡って、様々な権力者のもとに苦患を受けつづけたというが、どの権力者も「瞋恚を起こし」、「大きに怒り」、「大きに腹を立て」など、クレメンテへの怒りをあらわにする。それに対し、クレメンテは苦しみの中にありながら「打ち笑ひて」、「大きに喜び給ふ」、「喜び勇みて」など、キリストにある喜びで満たされている。これはクレメンテに限らず、彼女の養母ソヒヤにおいても同じである。

サンソヒヤは、御子クレメンテ御主に対し奉りて、受け給ふ御傷を見給ふ時、悲しみ給ふべきことなるに、御主の御大切に対して、却て大

きに喜び給ひ、窮民孤貧の輩を供養し給ひ、その身も新しき白衣を着し、大歓喜のしるしをあらはし給ふなり。

そして、「この喜び給ふことはマルチリヨの道を以て、天の娯樂を得給ふべきと明らかに分別し給ふによつてなり。」と、マルチリヨによってクレメンテが天の国に生まれ、キリストに救われたことは確実であるとソヒヤが弁えているからだとして述べられる。さらに、この喜びを保証する事実として、以下のような記述がある。

デウス ガラサのボンタアデを以て、大力量の世界と、天魔を敵軍にして、百戦百勝の利を得給ふことは、不思議の中の不思議ならずや？ 天魔は様々の計策をめぐらし、一年二年のみならず、二十八年の間、安否の合戦をなすといへども、終に一度も勝つことを得ず。

デウスは「天魔」と戦って負けたことはないことが強調される。キリストの勝利は、ヨハネによる福音書16章33節「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」(新共同訳)とあるように、確実なのである。

「サントアレイショ」伝では、ロウマ帝王の第一の臣下であるエウヘミヤノの子息アレイショが富貴を捨てて出奔し、乞食になって神に仕えるが、放浪の後に正体を明かさぬまま父の家へ乞食として入り込み、修行を続ける中で、父の召使から心ない仕打ちや嫌がらせを受ける。その時のアレイショの心境を、伝記は以下のように記す。

善人のアレイショかの者どものしわざを皆これ貴き御堪忍を破り、怒りを起こさせて悪道へ引き落とさんとする天狗の業にてあることをよくよく知り給ふ故に、これらの障碍を事の数とも思し召さずして、御堪忍なさるる。

アレイショを襲った苦難は、怒りを起こさせて悪道へ引き落とそうとする「天狗」の仕業なのであった。

仏教でも怒りは瞋恚、欲望は貪欲と表現され、愚痴とともに仏教の三毒

と呼ばれており、ここにも仏教の厭う要素が見出せる。

また日本において怒る天狗は、怨霊として現れる場合が多い。『太平記』には、恨みと怒りの中で死んだ者たちが天狗となって活躍する様子が描かれている。巻第二十五「宮方怨霊会_二六本杉_一事^付医師評定事」では、大塔宮護良親王を始め、恨みを含んで死んだ宮方の怨霊たちが天狗となって仁和寺六本杉に集まり、足利家に内紛を起こさせるための策略を練る。巻第二十七「雲景未来記事」にも、天狗の集会被描かれている。愛宕山の秘所にある座主の坊と思われるところには、崇徳院や淳仁天皇、井上皇后、後鳥羽院、後醍醐院など、悲運のうちに死んだ「悪魔王ノ棟梁ト成給フ、止事ナキ賢帝達」²⁰が居並んで、「天下ヲ乱候ベキ評定」を行なっていた。

このうち崇徳院については、『保元物語』巻下に詳しく記されている。保元の乱に破れた後、讃岐国へ遠流にされ、さらに自筆の五部の大乘経を八幡か、鳥羽もしくは長谷に納めたいという願いさえ拒絶されて、崇徳院は「其後ハ御グシモ剃ズ、御爪モ切セ給ハデ、生ナガラ天狗ノ御姿ニ成セ給テ、」²¹と、怒りのあまり生きたまま天狗になったといわれている。

『サントスのご作業』では、完全に悪である「天狗」が権力者に怒りを起こさせて、その怒りが善である聖人を喜びのうちに殉教させるという構図がみられるが、『太平記』の場合、怨霊の天狗の活躍は単に個人的な恨みを晴らすだけでなく、当時の政治批判にもなっており、天狗は完全に悪しき存在というわけではない。しかし、怒りと「天狗」の結びつきにおいて両者は共通しており、天狗と悪魔双方の性質として、怒りを挙げることはできそうである。

20 日本古典文学大系36、後藤丹治他校注『太平記』三、岩波書店、1962。60ページ。

21 新日本古典文学大系43、栃木孝惟他校注『保元物語 平治物語 承久記』、岩波書店、1992。133ページ。崇徳院と天狗に関しては、大和岩雄『天狗と天皇』、白水社、1997に詳述されている。

さらに、『太平記』は慶長年間（1596～1615）にキリシタン版『太平記抜書』六巻六冊として出版され、外国人宣教師たちに語学の教科書として用いられた²²。その出版は『サントスのご作業』より少し後になるが、出版以前から翻訳に携わっていた宣教師たちは『太平記』を読んでいたと思われ、『太平記』に描かれた天狗がキリシタン版の翻訳になんらかの影響を与えたことも考えられる。

また民俗学的な研究では、天狗は大木を切り倒したり天狗巖に対して非礼があったりなど、自分の領域を侵された場合に、人の命を奪ったり災厄を与えたりすることがあり、これらは天狗の怒りの行為であって、山の神の祟りであると考えられていたことが明らかにされている²³。

5. デウスに従う「天狗」と日本の天狗の両義性

『サントスのご作業』における「天狗」は絶対的な悪として描かれているが、必ずしも神に逆らう悪事だけを働いているわけではない。「サンペドロ」伝では、ペドロがキリスト教を伝道してキリシタンになる者が多数出たため、それまで人々の尊敬を受けていたのに、崇敬されなくなったシマン マゴという博士がペドロのことを「そねみたまて」、ペドロと奇特対決をする。博士が虚空に上がると、「人の影のごとくなるもの数多前後に見え」たが（バレット写本では、「人の形の如く天狗数多前後に見え」とある）、ペドロが「いかに天狗ゼズキリストの御力をもつて下知を加ふ、かの博士を放せ」と命じると、博士は大地に落ちて二日後に死ぬ。「天狗」の力で悪事をなす者の末路がどのようなものとなるのか、端的に示した話

22 海老沢有道『切支丹典籍叢考』、拓文堂、1943。138ページ。

23 小倉学「加賀・能登の天狗伝説考」（小松和彦編『天狗と山姥』、河出書房新社、2000所収。192～193ページ）

である。「天狗」は少しも抵抗をみせず、たやすく使徒の命令によって追
い払われる。

「サントアンデレ」伝では、アンデレをクルスにかけて殺したエゼヤス
が「我が館へ帰り着かぬうちに天狗つきたたり、諸人の前にて死」んだこ
とが描かれている。「サンマテウス」伝には、国司が前国司の娘エピゼニ
ヤを自分の妻にしようとしたが、エピゼニヤはキリストに仕える「比丘尼」
となっていたので、マテウスがきっぱりとその非を咎めると、国司は「大
きに怒りをなし」、マテウスを殺害したことが記される。その後、国司は
エピゼニヤのいた寺に火をつけるが、殉教したマテウスが現れて火を消し、
この火は国司の家を燃やす。国司父子にはデウスの裁きが下り、「子には
天狗取りつきて狂乱し、我が親の科をあらはして、」「父は癩病をうけ、自
害して死せられたり。」このように、悪事を働く者たちへの裁きをもたら
すものとして、「天狗」が用いられているのである。「天狗」は神の支配の
中で悪をなす存在として認識されている。

「サンタマリナ」伝においては、偽りをなす者に「天狗」がとりつく。
マリナは女性でありながら、マリノという名で男性としてキリストに仕え
ていたが、パンドシヨという人の若い娘が、自分の腹に宿った子の父親は
マリノであると偽る。その後マリノは寺を追い出され、病気で死ぬが、そ
の後日談に、「その日またこのサンタに虚名を申しかけたる女には天狗付
きて寺へ来たり、その身の過ぎし科を顕はし、その子の父をも顕はすなり。」
(バレット写本)とあり、マリナのために懐妊したと偽った女に「天狗」が
とりついて、真実を告白する。ここでは悪を働く者に「天狗」が憑いて、
真実を明らかにさせており、「天狗」が神のみ業のために用いられている。

「サンフランシスコ」伝では、「天狗」はそれほど恐れられてはいない。
フランシスコは父の商売に従って周遊したが、「世界の貪欲、ワイダアデ
の中にもデウスの心中に教へ給ふ望みの種をば損ぎすことは天狗も叶は
ぬものなり。」と、「天狗」の力はデウスには及ばないものとされている。

また、フランシスコがカルデアの館に滞留した時のことである。

天狗来たつてしたたかに打擲つかまつりたるなり。サントそのことを後に御傍輩に語らせられ、天狗は人を成敗するデウスのもののふなり。我があやまりに対して我を打ちたることもつともなり。

「天狗」はフランシスコが大名から心尽くしのもてなしを受けたことを非難しており、「天狗」が神に背く悪事を正そうとしている。それに続く場面でも、フランシスコがオラショしていると、「家の上に天狗馳せ集まりて、かしましくするを聞き給ひ、俄に外へ出て、クルスを唱へて宣はく。如何に天狗、万事叶ひ給ふデウスに対して、汝に下知す、我が身に対してデウスより許させらるるほど、あたをなせ、〈下略〉」と、デウスに許された範囲で悪をせよと「天狗」に呼びかけているのである。苦難も神の許しのうちに起こる試練であるという認識がある。

さらに、「サントセバスチャン」伝の末尾には、ロンバルディアという国で疫病がはやって多くの死者が出た時の様子が以下のように記される。

よきアンジョー一体と、又天狗一体ここかしこを駆けめぐるを数多の人々見たるとなり。天狗槍をひつさげて、よきアンジョーの下知にまかせて、人をつき殺すとなり。

この疫病は、マルチルを遂げたセバスチャンのためにアルタル（祭壇）を建立しなければ止むことがないと善人の夢にお告げがあり、神の裁きとして疫病が起こったことがわかる。「天狗」は完全に神の支配下にあつて、神の正義のために働いているのである。

キリシタンの説話において、悪魔がデウスの完全な支配のもとに置かれる中で悪をなし、時に神のみ使いのように振舞うことは、一見日本の天狗が神的な善の働きをなすのに似ている。『太平記』巻第十「新田義貞謀叛事^付天狗催_一越後勢_一事」では、新田義貞が鎌倉幕府打倒のために挙兵する折、天狗山伏が越後国中にそのことを触れ回って、新田氏の親類一族をすばやく召し集めたことが記されており、天狗は不思議な能力で新田義貞の

拳兵を助けている。

『沙石集』巻第九ノ二十「天狗、人に真言教へたる事」では、ある修行者が古堂で一夜を明かそうとしていると、人がたくさん来る気配がした。恐ろしいので隠形の印を結んで身を隠したつもりだったが、一人の僧が「御房(ママ)の隠形の印の結び様の、違ひて見ゆるぞ。おはしませ、教へ申さん」²⁴と言って、正しい印の結び方を教えてくれる。この僧は天狗であった。この天狗について編者無住は、「この天狗は善天狗の、真言師にてありけるにこそ。」と述べている。

悪天狗は一向嬌慢、偏執のみありて、仏法に信なき物なり。仍りて諸の善行を妨ぐ。出離その期を知らず。善天狗は仏道に志あり。知恵、行徳もありながら、執心失せず、有相の智行に障へられて、かの類に入れども、かしこにして仏道をも行ひ、人のするをも障へず。悪天狗の障ふるをも制して、仏法を守る。此は出離も近しと云へり。

天狗には善天狗と悪天狗とがあることを仏教的な見地から論じている。

また小倉学氏は、加賀・能登の天狗伝説の中に、天狗には放火して災いをもたらす面と防火の神の面との、相反する伝承があることを紹介している。「天狗には、神隠しをはじめ人間に大きな危害を加えるところもあるが、その反面、恩徳を施す場合も少なくない」²⁵のであった。

日本の天狗の場合は悪魔のように絶対者の前に位置づけられることはないため、悪の観念も相対的なものであり、曖昧な印象を受ける。しかし天狗が持っている、仏法に敵対したり人間に祟りをなしたりするような悪の側面と、仏法を助けたり山の神として信仰されたりした善の側面との両義性は、悪でありながらデウスの絶対的な力に従って神の御心をなす悪魔の

24 新編日本古典文学全集52、小島孝之校注・訳『沙石集』、小学館、2001。483～486ページ。以下、『沙石集』の引用はこれによる。

25 注22の195～198ページ。

性質と似通うものを感じさせるのである。

6. おわりに

日本の天狗は、仏法の根幹を支えていた宗教者である仏僧が墮落したものであり、キリスト教の悪魔も神に一番近い存在であった天使が墮落したものであった。どちらも善であり、聖なる存在が高慢や執心などのために悪に汚れて誕生したのである。そして両者ともに翼があって空を飛ぶことができ、他の人々にとりついて、悪の道へ引きずり込もうとしている。またキリスト教の悪魔は未来の事柄に精通しており²⁶、『太平記』の天狗が「雲景未来記」などで未来を予言しているのを思い起こさせる。

天狗は仏教だけでなく修験道や庶民的な信仰など、様々なものが混ざり合っただけでなく、時代によってもそのイメージは多様に変化した。西洋の悪魔のイメージも、旧新約聖書に描かれたものがずっとそのままの形で信じられていたわけではなく、時代によって大きく変化した。十二世紀以降の演劇では、民衆芸能や民話の影響を受け、悪魔は喜劇的になる²⁷。天狗も悪魔もともに時代が下ると恐ろしい存在ではなくなり、トリックスター、道化的な役割を担わされていく。特に天狗も悪魔も聖職者の間では恐怖の面が強く、民間に広がるほど道化の面が強くなるようである²⁸。

26 「悪魔はあらゆる秘密、なかでも未来の事柄に精通していると見なされていた」(ジョルジュ・ミノワ著・平野隆文訳『悪魔の文化史』、白水社、2004。92ページ)

27 ジェフリー・B・ラッセル著・大瀧啓裕訳『悪魔の系譜(新装版)』青土社、2002。242ページ。

28 「悪魔の力を強調する修道院の傾向は、サタンを莫迦ばかり無力なものに思わせる民話や伝説の逆の傾向と釣合がとれている。これは修道院の見解の恐ろしさに対する、ごく自然な心理的反応であった。」(注27の182ページ)日本でも、

キリシタン版の翻訳に携わった日本人は、養方パウロがもと医師であるなど、教養ある知識人であったことから、日本の古典や仏教などにもおそらく精通していたと思われる。そうした知識と理解のもとに、悪魔は「天狗」と翻訳された。

「天狗」と翻訳したことで様々な誤解も生じたが、必ずしも悪訳というわけではなかったと私は考える。キリシタン版の製作に携わった宣教師や日本人たちがどこまで自覚していたか分からないが、両者の共通点から考えると、歴史的に悪魔を「天狗」として受容する素地は十分にあった。他の仏教用語が原語に変えられても悪魔が「天狗」と翻訳されつづけたのは、やはり悪魔と天狗が共通する要素を多く持っていたからなのではないだろうか。

昔話の天狗は天眼鏡で江戸・大阪・京などが見えると騙されて、隠れ蓑を偽りの天眼鏡と交換してしまうなど、愚かな天狗像が描かれている。(宮本袈裟雄「天狗伝承とその背景」,注23『天狗と山姥』所収。243ページ。同著『天狗と修験者』,人文書院,1989にも所収。)